

義母と近所の熟女と3人でセックスする

性欲が芽生えた息子

「タクト、話があるんだ」

父親にリビングに呼び出されたタクト。父親は神妙でけど少し嬉しそうな表情をしていた。

「良い女性と上司の紹介で知り合いになってな。父さん、結婚することになったんだ」

突如そう告げられたのはタクト。要は父親の再婚相手の新しい母さんがやってくることになったのだ。

婚姻届けは既に役所に提出済みとのこと。さっそく3日後にこの家にやってくるとのことだ。

タクトは突如のことに、驚きだか喜びだかよくわからない気持ちになっていた。

新しい家族が出来る。それは喜ばしいことなのだが。

タクトの家族は父、兄、そしてタクトの3人。3年前に一緒に住んでいた父方の祖母が亡くなり、兄は結婚して既に家を出ている。

実の母さんと父さんが離婚したのは4年前。

離婚して離れて以降も、タクトは携帯でたまに実の母さんとも連絡は取っているが……。兄と同様、厳しく優しく愛情ある育てられ方をしたタクト。

ふと、机の上のこの間コンビニで買った週刊誌をめくる。

水着の女性。タクトはズボンを下ろしてペニスをしごきたてた。

「うっっ！！うううっ！！！！タクトはうめき声に似た小さな声を上げて全身を震わせる。ペニスの先っぽからホースの先をしぼめた時の水しぶきのように鋭い勢いで白く濁った精液が噴き出してきた……」

「びゅっ！！びゅびゅびゅっ！！びゅるるるるるっ

っ！！！」

タクトは跳ね回るような快樂に自分で茫然する。茫然自失状態である。

「あああああつ・・・・・・・・くあああああああ・・・・・・・・」

ペニスの根元に少し前から生えだした薄毛が、ペニスを握る手の側面に少し当たる。

タクトは、自分の股間から毛が生えてくるのが嫌で、近いうちに全てカミソリで剃り落してしまおうと考えている。

「こんにちはっ！！いい天気ですねえ！！！」

白いタクトの父さんの自家用車の車窓から近所のおばさんに挨拶する女性。

玄関前に止まって下りてくる。少し吹いた緩い風に乗せるように髪をかき上げる。新しい母さんがやってきた。

茶色い髪。少し派手な雰囲気もある色気のある女性だった。

「あ、こんにちは！！あなたがタクト君かな？」

意外なものの言い方に少し戸惑う。

もっと、初対面と言うことで神妙な感じになるのかななどとタクトは思っていた。

「そうです・・・・・・・・よ、よろしくお願ひします」

少し面白おかしい初めての出会い。

義母と一緒に暮らす生活がスタートした。

白いキャミソールの胸元がとても膨らんでいる。

新しいお母さんはマンションのエレベーターまで小走りで向う。

「ちょっと家ですることがあるから・・・・・・・・」

薄い紺色のデニムは太ももにむっちり密着。暑い夏の気温に少し汗ばみ肌に密着したキャミソールの背中。

足を前後するたびにむっちむちの左右に分かれた肉付きのいいお尻は揺れる。

タクトはここ最近、芽生えたエッチな妄想で頭がいっぱいである。

何を見ても、雑誌のエッチなコーナーなんか見るともう当然と言っているくらい、頭の中は卑猥な感覚で埋め尽くされる。

この日も新しい母さんのあまりの色気に、頭の中は爆発しそうなほど隠微な色で一色だった。

「あのおっばい……もし両手でつかめたら……」

そう呟きながらも、タクトは頭の中で母さんの股間に顔を埋めていた。

おっばいなんて次元じゃない。オマンコ。つまり足と足の間。お股をじゅぶじゅぶと音を立ててすすりたてたい。それだけだった。

わりとちょっぴりきつそうな雰囲気もあったのだけど、新しい母さんは気さくで、会話も弾む。これまでのことなど、色々なことを母さんに話した。前の母さん、つまり生んだ母親のことなども話した。お兄さんのことも。

義母は一日目の夜からチキンカレーを作ってくれるなど、料理の腕も確かだった。

生活力抜群の新マザー。

だけど、膨らむエッチな妄想。どうも……母さんとエッチなことをするイメージがいつまで経っても払拭されない。

薄く目を細めた母さんが誘惑しているのか。もっとも性欲しか頭のないタクトの身勝手な妄想である可能性は高いが。真相は不明だ。

タクトは近所のおばさんに相談することにした。

次の日、学校帰り、近所のおばさん宅へ立ち寄る。

セミやほかの虫たちが懸命に泣いて夏の活動期を誇張している。

「……それは若い男の子だと普通のことよ」

そしてニヤッと笑った。

「母さんに筆下ろししてもらいなさい」

迷うこともなくそう告げると、おばさんは首筋を小指で撫でた。

「筆下ろしっっ！！！」

————— 体験版はここまでです。—————